出雲大社，石見銀山，萩と津和野を巡るための文献研究の記録（第２報）

―最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨―

香川貴志 [*1]

General Articles and their Abstracts Regarding Izumo Taisha Shrine, Iwami-Silver-Mine, Hagi and Tsuwano（Part 2）

KAGAWA Takashi

抄　録：本稿は，2021（令和3）年度の前期集中講義として実施した学部開設科目「地理学研究」と大学院開設科目「地理学特論Ⅱ」の事前学習の記録である。その内容は事前学習のアウトライン，および事前学習で扱った文献の要旨である。とくに後者は付録として本稿の大部分を占め，今回の対象地域を巡る際に効率的に現地を学ぶ資料として活用できる。文献要旨は，地理学的考察を含む対象地域に関わる比較的新しい文献80件に及ぶ。対象となる文献数が多いため，香川（2022a）には文献の検索とその方法，文献要旨をまとめる担当者の決定，および出雲大社13件，萩20件の文献要旨をまとめた。紙幅の制約のため，本稿には石見銀山37件，津和野10件の文献要旨を付録として収録した。したがって，本稿の本文や参考文献は極めて限定的である。事前学習における文献研究の方法については上記の香川（2022a）に記し，事前学習で扱った地形図読図の詳細と現地授業については香川（2022b）にまとめた。

キーワード：世界文化遺産，重要伝統的建造物群保存地区，文献研究，石見銀山，津和野

Ⅰ．文献研究の意義について

学生たちの卒業論文や試験に代替するレポートを読んでいると，その文献渉猟は総じて必要な水準に達していない。このことは本稿に先立つ香川（2022a）でも述べたが，文献渉猟や文献研究の甘さは，論文やレポートで触れている文献の量と質によって判断できる。たとえば，文献の量については主題によって差があるものの，地理学の卒業論文であれば，少なくとも20～30本は必要である。修士論文であれば卒業論文の3～4倍の文献量を要するだろう。研究の潮流の中で自身の研究を的確に位置づけるには，参考文献の半数前後は最近20年程度のうちに刊行された学術論文であることが望ましい。もっとも，地理学の中でも歴史地理学のように長い時間的スパンの中で研究活動が行われる領域の場合，「半数前後は最近20年程度のうちに刊行された」という条件に緩和することができるだろう。

他方，参考文献の質については，近年引用されることが多くなったWebサイト[1)]が過半数に及ぶような論文やレポートは，明らかに慌てて取り組んだものやコピペの多用で仕上げた雑駁なものが大多数である。さらに学術論文や学術的記事の比率が極度に低く，参考文献や引用文献の大

[*1] 京都教育大学，同附属桃山小学校（併任）

部分が単行本であるものは，往々にして単行本のごく一部を参照して参考文献欄を飾っただけの代物が多く，これも素人目には良く見えても相応の経験を積んだ玄人の目はごまかせない。つまり，少し慣れた者が読むと「底の浅さ」が見え隠れしてしまうため，高い評価を下しにくくなる。ただし，一般読者や初学者を対象とした一般書や入門書では敢えて学術論文を割愛しているケースもあるため，参考文献だけで早々に書籍や論文の価値を測ることは避けるべきである。

このように文献研究は，論文やレポートを書くには避けて通れない非常に大切な作業工程である。しかしながら，大学の授業でこのような指導をする場は限られている。おそらく筆者の勤務先では，ごく一部の授業科目にその機会があるに過ぎない。たとえば，新入生対象の「KYOKYO スタートアップセミナー」（一部で共通教材を使いながら，文献の引用方法やマナーに関わる研究倫理，文献の収集や活用，調べたことを発表するプレゼンテーションの技法などを伝授），3回生と4回生での演習（ゼミ）程度ではなかろうか。筆者はこれだけでは不十分と考えているので，地理学に限らない汎用性を視野に入れつつ，2回生配当の「地理学概論」で野間ほか編著（2017）『第2版　ジオ・パルNEO―地理学・地域調査便利帖―』をテキストにして文献の渉猟や活用技法について講じている。しかし，それとて具体的な実践活動を伴うものではない。そこで，奇数年開講の「地理学研究」（本授業科目）と偶数年開講の「地理学特講」における事前学習で積極的に文献研究を織り込んできた。

今年度の「地理学研究」は，エクステンシブ型のフィールドワークを準備したため訪問地が多く，事前学習会で扱う文献数が必然的に多くなった。こうした理由で，渉猟対象を比較的新しい文献に絞っても全ての訪問地域に関わる文献数は合計80本に及んだ。これらを1本の論文にまとめるのは規程枚数の上限から考えて無理がある。そこで今回は，やむなく文献研究を（第1報）と（第2報）に分割した。第1報には出雲大社と萩の文献を収録したので，本稿の付録として掲載する文献要旨は，石見銀山と津和野の2か所に関する文献を基にしたものである。

Ⅱ．石見銀山，萩，津和野に関する文献要旨とその利活用について

本稿の付録に収録する文献は，石見銀山（大田市大森地区）37本と津和野10本の計47本である。文献選定の基準や担当者の決め方の詳細については香川（2022a）にまとめている。付録に収録した文献要旨は全て科目担当者の筆者が精読のうえ推敲を重ねたものである。香川（2022a）に収録した出雲大社と萩に関する文献と同様，今回の訪問地域は歴史ある地域ばかりなので，純粋に歴史学的な見地から著された文献も珍しくなく，その中から地理・地理学に関わる文献を選定する作業は決して楽なものではなかった。

とはいえ，事前に然るべき文献を読まないまま現地を訪問すると，出雲大社では神社のみが印象に残り門前町とその地域振興策は埋没してしまう恐れが高い。同様に石見銀山では龍源寺間歩が強く印象に残って大森集落の佇まいは，それが重要伝統的建造物群保存地区であっても記憶には残り難いと考えられる。また，萩は見どころが多く分散しているため展示が秀逸な明倫学舎や萩博物館の印象だけが心に留まる懸念があり，津和野では京都とのかかわりが深い文化を前もって学んでから訪問すれば現地授業での見学が一層実りの多いものになるはずである。

そこで，第3回事前学習会の際，香川（2022a）と本稿の付録に収録した要旨を合冊のうえ『文

献要旨集』として配布した。そして『文献要旨集』を通読して印象に残った文献を４つの訪問地からそれぞれ１つずつ選ばせ[2)]，各文献を選んだ理由を181字以上，200字以内で添えたレポート作成を受講生に課した。この宿題は，2021年８月10日深夜を締切としてＥメールに添付したWordファイル[3)] で提出させた。このレポートについても事前学習における成績評価材料にした。

上記の「文献要旨集」は嵩張るものでも重いものでもないため，現地実習（8月19～21日）に持参させ，必要に応じて適宜参照できる環境を整えた。次頁からは，付録として石見銀山と津和野に関する文献（計47件）の書誌情報, キーワード, 要旨を掲出する。これらの地域を訪問する際，本稿は少なからず役立つはずである。

謝辞

コロナ禍が急速に深刻さを増すなか，私たちの徹底した感染抑止策を好意的にご理解いただいて，私たち一行を快く受け入れてくださった現地の皆様に心より感謝申し上げます。

脚注

1）最近は大学教員でさえWebサイトのことをホームページと呼ぶ者が多い。インターネットを通じて得られる, サイト名（アドレス）を持ったものはWebサイトと呼ぶのが正しい。他方, ホームページとは，Webサイトを開いた時の初期画面（デフォルト）のことである。

2）訪問地域ごとに最も印象に残った文献を選ばせる際，各自が自身で担当した文献は除外するよう指示し，担当以外の文献の内容を学ばせる工夫をした。

3）課題をWordファイルで提出させたのは，提出されたファイルを使ってテキストマイニングを施す素材化を考えたからである。ただし，今回は筆者の習熟度の問題もありテキストマイニングを実施していない。

引用・参考文献（本文の付録で扱った文献は書誌情報の重複を避けるため当欄では割愛）

香川貴志（2022a）出雲大社，石見銀山，萩と津和野を巡るための文献研究の記録（第１報）―最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨―.『京都教育大学環境教育研究年報』，**30**，pp. 57-72.

香川貴志（2022b）COVID-19拡大抑止に熟慮したフィールドトリップの実践―出雲大社，石見銀山，萩，津和野を巡る2021（令和３）年度「地理学研究」の覚え書き―.『京都教育大学環境教育研究年報』，**30**，pp. 87-102.

野間晴雄・香川貴志・土平　博・山田周二・河角龍典・小原丈明（2017）『第２版　ジオ・パルNEO―地理学・地域調査便利帖―』海青社.

付録（事前学習で扱った文献の要旨）

★COVID-19対応のため，原則的に本学所蔵資料，J-STAGEやIR（機関リポジトリ）で無償ダウンロード可能な文献（一部は他機関からの取り寄せを要する文献も含む）について受講生が要旨をまとめ，それを香川が推敲のうえ整えた。無償ダウンロードができない文献の約半数および外国語で書かれた文献については，原則として香川が他機関から取り寄せて要旨をまとめた。

「石見銀山」で検索してヒットするもののうち，地理学に関連が深いと考えられる2010年以降に発行された5頁以上の文献を選別した。ただし，内容が類似していると考えられる文献は新しい方を優先記載している。なお，「石見銀山」はキーワードから割愛している。

▼ G01

Reference：赤沢克洋・佐藤　充（2010）. 観光リピート需要における満足感非経由要因の把握と戦略的含意―石見銀山を対象としたケーススタディ―. 農村計画学会誌，**29**，297-292.

Key Words：観光リピート，顧客満足度，観光地属性，リピート需要，満足感非経由要因，戦略的含意

Abstract：観光リピートには顧客満足度が関係すると思われがちだが，本研究では満足感を経由しないそれ以外の要因の模索がなされた。その結果，観光名所価値，歴史・文化価値，店舗価値，アクセス，地域の印象などの観光地属性が満足感を経由せずにリピート需要に影響するという満足感非経由要因の存在が明らかとなった。満足感非経由要因の戦略的含意として，観光地属性に多様性を持たせることでの再訪期待感の醸成，観光圏域全体での取組の重要性の他，顧客満足度に依拠したリピーター獲得戦略も必要であるとわかった。

▼ G02

Reference：秋山伸隆（2010）. 二〇〇九年龍谷大学史学会総会講演録　豊臣期における石見銀山の支配. 竜谷史壇，**132**，1-14.

Key Words：銀山，直轄領，豊臣氏，毛利氏，共同管理

Abstract：戦国時代，銀は火薬などを手に入れるための貨幣となっており，銀山は戦国大名らにとって重要な財源であった。その象徴たる石見銀山は，豊臣氏の直轄領であったと長らくされてきたが，近年では毛利氏との共同管理だったとの解釈もあり，その見方は二分されている。しかし，本論文は毛利氏が単独支配していたのではないかとの異説を提示している。様々な資料を用いた他の銀山についての考察からも，それは妥当性のある解釈となっており，当時の石見銀山の在り方を再考する契機となる試論であると評価できる。

▼ G03

Reference：浅見良露（2014）. 石見銀山遺跡における,』世界遺産登録に伴う観光地化と地域の対応. 比較文化年報，**23**，1-18.

Key Words：世界遺産，観光地化，制度的整備，地域文化資源，交通規制

Abstract：本論文では，石見銀山遺跡の世界遺産の指定を通じて，地域文化資源の保存に対する観光の役割，その影響について検討している。世界遺産の指定には，地域を知る効果や制度的整備，地域文化資源の調査・評価・保存・活用へのモチベーションを高めるなどの意義がある。その一方，指定を受けるにあたり，観光地化と地域文化資源に関する課題や住民参加の重要性，管理・保存の手段としての交通規制の意義と課題も伴うため，それらを適切に管理・対応していく課題が残っていると結論付けている。

▼ G04

Reference：井出　明（2018）. ダークツーリズムと世界遺産（第2回）産業遺跡の光と影―軍艦島，オースト

ラリア囚人遺跡群，石見銀山―. kotoba，**32**，156-161.

Key Words：明治日本の産業革命遺産，強制労働，負の側面，光と影，ダークツーリズム，

Abstract：ユネスコ世界遺産「明治日本の産業革命遺産」に指定された端島（軍艦島）などの史跡，そして石見銀山など多くの労働力投下を伴う歴史遺産では，強制労働や人権侵害などの負の側面が厳然として存在し，遺産の希少性や美しさとは逆の性格を持っている。つまり我々は，産業化の社会情勢の中での「光と影」を意識して歴史遺産と対峙する必要がある。こうした点を重視して現地を訪問する観光行動は，近年ダークツーリズムとして脚光を浴びている。そこでは歴史遺産や産業遺跡の「見せ方」が問われることになる。

▼ G05

Reference：伊藤徳広（2020）. 石見銀山―登録後の盛り上がりから持続可能な保全へ―. 月刊文化財，**685**，20-24.

Key Words：世界遺産，パークアンドライド，来訪者，情報発信，保全

Abstract：世界遺産登録後に石見銀山の来訪者が急増した。受け入れ体制の整備として，大森の町並みから龍源寺間歩までは徒歩か貸自転車で移動するというパークアンドライドが実施されている。また，世界遺産としての価値が正しく伝わっていない，遺産の整備が進んでいないという課題解決のための努力がなされている。本論文では，当地域の強みについて，住民自らが世界遺産の保全と生活を真剣に考え，持続可能な保全を目指していることを揚げ，今後も行政と住民が共に考動していくことが重要であると結論付けている。

▼ G06

Reference：遠藤寛之・森山昌幸・松村和典・藤原章正・神田佑亮・鈴木祥弘（2019）. 安全性に着目したグリーンスローモビリティの導入可能性の検討―島根県大田市・石見銀山大森地区を例として―. 交通工学研究発表会論文集，**39**，31-36.

Key Words：グリーンスローモビリティ，ゴルフカート，社会実験，錯綜分析，安全性評価

Abstract：地元居住者を除いて車両通行が規制されている石見銀山の大森～龍源寺間歩の間は，片道 2. 3km で高低差が約 100m あり，とくにレンタルの電動機付き自転車を利用しない移動に難点がある。そこで，ゴルフカートやミニバンをグリーンスローモビリティとして社会実験運行し，観光客から意見聴取をした。その結果，低速かつ小型のゴルフカートはミニバンよりも歩行者や自転車との交通錯綜の際に危険と認知される割合が低く，他者（車）との親和性が高く，定性的・定量的に共存可能な移動手段であることが判明した。

▼ G07

Reference：大島一朗（2020）. 石見銀山大久保坑の坑内軌道跡―世界遺産への新たな政策―. 産業考古学，**157**，33-48.

Key Words：大久保坑，清水谷精錬所，犬くぎ，枕木，坑内軌道

Abstract：本論文では，大久保坑，大久保坑～清水谷精錬所の坑内軌道跡で発見・再評価された犬くぎ，レール，および枕木，枕木跡の調査と実証課題の考察を通じて，明治期における石見銀山の坑内軌道の詳細を詳らかにしている。「犬の頭」状の小型犬くぎの，日本初となる大規模かつ体系的な発見例と考えられる。とくに約 120 年前の犬くぎと枕木が当時のまま奇跡的に現場で残されていた点に希少性を見出せる。そのうえで，坑内軌道跡を世界遺産「石見銀山とその文化的景観」の構成資産に加えることが提案されている。

▼ G08

Reference：岡本隆司（2016）. 銀　石見銀山が世界経済を動かす（世界史のなかの戦国時代）. 文藝春秋 special，**10**（2），157-163.

Key Words：戦国時代，中国生糸，日本銀，東シナ海，南蛮渡来

Abstract：下剋上によって社会の一体化が進み，戦国時代には現在の日本列島全域に大開発の波が押し寄せた。商取引も発達し，貨幣として銀が多用されるようになった。南蛮渡来によって，日本とヨーロッパ間に交流が

生まれ，当時の東シナ海沿岸域は，開発と交易のブームに沸き立つ無秩序な世界となった。貿易品の中心は，中国生糸と日本銀であり，それがグローバルな通商にも展開した。日本の銀は，世界全体の三分の一を占め，石見銀山はそのうち約20%を占めるなど，世界経済に多大な影響を及ぼす存在であった。

▼ G09

Reference：笠井今日子（2013）. 近世中期石見銀山領における鉄山政策と鑪製鉄業の展開．史学研究，**282**，46–72.

Key Words：御林請負制度，鉄山政策，鑪製鉄，連帯意識，新興勢力

Abstract：鉄山政策上，鑪製鉄の際の熱源として木炭，すなわち山林資源の確保は大きな意味を持っており，山林の利用権を入札を通じて得る御林請負制度というシステムが当地域に存在した。鑪製鉄業が技術革新とともに発展し，鑪師は安定的な燃料供給の確保のため御林利用期限の延長制度を活用するようになった。力のある鑪師は事業拡大を図るとともに鑪師間の連帯感も強くなり，近世後期の不況を凌ぐ原動力となった。しかし，19世紀以降は新興勢力の参入が既存の鑪氏の弱体化を促し，小規模製鉄所の濫立を誘発した。

▼ G10

Reference：紙田路子（2010）. 構造主義からの小学校社会科歴史学習の設計―「石見銀山から江戸幕府をみる：江戸システムの確立」の授業設計―. 社会系教科教育学研究，**23**，101–110.

Key Words：構造主義，歴史学習，歴史認識，経済的視点，小学校

Abstract：旧来の小学校における歴史学習は歴史的事象を時系列ごとに並べる学習，または自己の立てた仮説に裏付ける資料を集め，歴史的事象の説明を図るものだった。つまり理論が先行し，子どもの経験や発見を考慮しない授業設計だった。他方，子どもは何かを理解するとき，比較や分類を通じて，構造を抽出し知識を蓄積していく。そこで筆者は，小学校第6学年の石見銀山の単元を，身近な教材や体験から歴史の構造を抽出する方法，歴史学習に経済的視点，構造の変革の視点の3点を取り入れ，授業設計・提案している。

▼ G11

Reference：黒田乃生・井上雅仁・仲野義文（2019）. 近世における石見銀山の森林利用と景観．世界遺産学研究，**6**，19–28.

Key Words：森林資源，薪炭林，精錬，炭，疎林

Abstract：石見銀山の周辺は，かつて鉱山の生活・生産に使われた薪炭林としての森林資源が現在に伝えられたとされ，世界遺産の構成要素となっている。しかし，実際には御囲村や御立山のマツやタケなどの多くの森林資源が使用され，とりわけクリは膨大な量が使用されていて，17世紀初頭から立木の枯渇が始まっていた。このことから，近世の銀山周辺では高木の森林はほとんどなかったと考えられる。このような当時の疎林の様子を踏まえれば，現在における森林の荒廃などの問題解決のために森林管理を徹底する必要がある。

▼ G12

Reference：小林准士（2011）. 世界遺産そして地域遺産としての石見銀山遺跡．日本歴史，**752**，101–105.

Key Words：文化的景観，イコモス，最盛期，歴史的関連性，重層的視点

Abstract：石見銀山は鉱山のみならず，関連する周辺の史跡も含めた「石見銀山遺跡とその文化的景観」という名称でユネスコの世界遺産に登録されている。諮問機関であるイコモスでは，世界遺産登録直前，価値証明への指摘等を理由として「記載延期」を宣告した。本論文では，本稿の著者もイコモスと同様の立場に立っており，世界遺産としての価値の分かりにくさについて指摘し，石見銀山の価値を平易に伝えるためには，複数の史跡や文化財と関連させた重層的視点によるストーリー設定が必要であると説いている。

▼ G13

Reference：古安理英子・赤沢克洋（2018）. 世界遺産における旅行の発動要因の充足に関する定量分析―石見銀山を事例として―. 地域活性研究，**9**，220–229.

Key Words：世界遺産，発動要因，誘因要因，パス解析，アソシエーション分析

Abstract：本研究では，石見銀山の世界遺産観光資源が発動要因の充足をもたらすか否かについてパス解析とアソシエーション分析により検証している。その結果から，遺産資源は発動要因の充足への期待と満足をもたらす効果が限定的であることがわかった。さらに，自然や散策等の観光化資源が誘因要因となって遺産資源だけでは不十分な発動要因の補完を担っているこが判明した。さらに，この検討を通して，産業遺産を核とした世界遺産における観光誘客に向けたマネジメント戦略が提示されている。

▼ G14

Reference：古安理英子・赤沢克洋（2020）. 産業遺産への満足をもたらす要因に関する定量分析―石見銀山跡における経験の評価からの接近―. 地域活性研究，**12**，25-34.

Key Words：産業遺産，経験評価，重回帰モデル，親近感，五感

Abstract：本研究は，産業遺産への旅行者の満足をもたらす要因を産業遺産における経験に着目するとともに，石見銀山を分析対象に設定して調査と考察を行った研究である。。結果，重回帰分析による検証を通じて産業遺産の経験の多くが満足をもたらす要因として有効であるとの結論が導出された。また，驚きや珍しさを感じる経験，知識や視野が広がる経験，地域の人々に親近感を感じる経験，五感が刺激される経験といった産業遺産における経験が遺産自体への満足を増幅していることも確認された。

▼ G15

Reference：高橋　悟（2011）. 民話に基づく世界遺産石見銀山天領内大田市大屋町の農村活性化について. 島根地理学会誌，**45**，1-11.

Key Words：鑑札，ネバ土，大田市大屋地区，地域活性化，果樹栽培

Abstract：中世に石見銀山で採掘された銀の積み出し港に至る間の大田市大屋地区は，今や過疎化と高齢化が進む地区である。本研究は，その地域活性化に向けて何が必要か問うことを目的としている。この地は，鑑札が無ければ耕せないほどの「ネバ土」に覆われ，その性質は粘性が高く水捌けの悪いものであった。そのため，従来はその土壌に適するイネやタケノコの栽培が行われてきた。本論文では，土壌や気候の特性を活かした果樹栽培が地域活性化の一手段として提言され，そこで老若男女の参画が提案されている。

▼ G16

Reference：高橋　悟・仲野義文・藤原雄高（2017）. 中世石見銀山銀積出し港の地理的検討. 島根地理学会誌，**50**，79-86.

Key Words：銀，積出港，鞆ヶ浦港，温泉津沖泊港，自然地理学的視点

Abstract：本研究では，なぜ，鞆ヶ浦港，温泉津沖泊港が中世の銀積出港として使用されてきたのかを，当時の石見銀山を取り巻く歴史的状況，立地状況，海上交通状況を踏まえ，自然地理学的視点（気象）と立地の関係から検討している。結果，良港の条件の１つである船の湾への入出，係留のし易さについて，気象とくに風との関係からの検討が稀有であることが判明した。そこで，両港に近い浜田気象台の資料を基に，風とその影響で生じる波浪の視点から分析が施され，両港への操船・係留の容易さが実証された。

▼ G17

Reference：武田竜弥（2020）. 産業文化の旅（第5回）石見銀山（島根県大田市）. とらんす・あくしょんず，**5**，203-211.

Key Words：世界文化遺産，大内氏，銀精錬，重要伝統的建造物群保存地区，大田市大森地区

Abstract：本文献は「石見銀山を観光する」という観点から，博多の大内氏による管理に始まる石見銀山の略史，銀の精錬方法についての説明がなされる。これらについては，江戸時代にまとめられた『銀山旧記』に詳しい記述がある。石見銀山に価値を与えているのは，近世の鉱山の特徴を今に伝える間歩などの遺跡群が良い状態でまとまって残存していることである。この価値や魅力を一層高めているのが，見学拠点ともなる世界遺

産センター，そして重要伝統的建造物群保存地区に指定された鉱山集落中心地の大森地区である。

▼ G18

Reference：張　海燕・森田優己（2020）. 歴史的資源保存地域における観光マネジメントの課題―白川郷・石見銀山・有松を例として―. 桜花学園大学学芸学部研究紀要，**12**，17-37.

Key Words：世界遺産，観光公害，まちづくり，官民協調，観光政策

Abstract：この研究は，世界遺産，重要伝統的建造物群保存地区や日本遺産に指定された集落（白川郷，石見銀山，有松）の観光マネジメントについての研究である。地域が上述のような遺産や保存地区に指定されると，一時的あるいは継続的に観光客が増え，しばしば集落が観光公害に見舞われる。観光客に対する薄利多売的な接遇にも限界があり，地元居住者と行政が観光客の受け入れとまちづくりのバランス確保に努めながら，居住者の安寧な生活環境を維持していける官民協調に基づいた観光政策の展開が強く望まれる。

▼ G19

Reference：鳥谷芳雄（2014）. 石見銀山「柵之内」の推定復元―19世紀前半絵図史料にみる「垣松」から―. 古代文化研究，**22**，139-148.

Key Words：柵之内，構成資産名，絵図資料，垣松，推定復元

Abstract：本研究では，17世紀前半に石見銀山の中核部分（山内）を指して表され，今日では世界遺産となった石見銀山遺跡の構成遺産名ともなっている「柵之内」について，現行の推定図における「柵之内」の範囲についての疑問点が指摘されている。とりわけ19世紀前半に描かれた絵図資料に表現されている「垣松」に関して精査してみると，推定復元して図示が可能な「柵之内」の範囲は，現行の復元図における「柵之内」の範囲とは齟齬があり，そこに誤りのある可能性が高い。

▼ G20

Reference：仲野義文（2010）. 江戸幕府の財政を支えた石見銀山―ハプスブルグ家と江戸幕府―. 歴史読本，**55**(11)，82-87.

Key Words：ハプスブルク家，江戸幕府，銀山，シルバーラッシュ，徳川の平和

Abstract：本論文は，16世紀のスペインのハプスブルク家と江戸幕府の財政を支えた銀山について着目し，その共通点と違いを分析した研究である。ハプスブルク家は，銀山の利益の一部を徴収して莫大な富を得たが，築いた富の大部分は戦費へと消えていった。他方，江戸幕府は銀の産出地域を直轄領として銀山の開発を国家的事業に位置づけたため，より多額の富を直接的に手に入れることができた。得られた富は，統一貨幣の鋳造や貿易の管理など軍事・外交・経済など幕府の重要な基盤施策となり統治体制の盤石化が図られた。

▼ G21

Reference：仲野義文（2013）. 石見銀山の文化とその基層（歴史の中の金・銀・銅鉱山文化の所産）―（日本の鉱山と地域社会―生産・信仰・暮らし―）―. アジア遊学，**166**，85-98.

Key Words：鉱山文化，文化的基層，祭礼，儀式，庶民文化

Abstract：江戸時代における鉱山文化とは，鉱山の繁栄を祈願する祭礼や儀式を表し，生野の「山下り」や秋田・阿仁銅山の「山神祭礼」，そして石見では海で採れたものを神社に祀って祈願する「山入祭礼」が中心的行事として行われていた。他方，鉱山地域における文化的基層は，鉱山の繁栄祈願が多く取り上げられるが，銀山町の富裕層の間で茶の湯が流行り俳諧を出版するなど，同じ鉱山地域とはいえ，鉱山祭礼や儀式を行う宗教的文化の発展とともに，一般的な庶民文化も花開いていたと考えることができる。

▼ G22

Reference：仲野義文（2017）. 石見銀山遺跡. 日本歴史，**824**，49-56.

Key Words：比較研究，産業遺産，自然との共生，文化的景観，地域遺産

Abstract：本論文は，石見銀山遺産とその文化的景観が世界遺産に登録に至るまでの取組の過程と，登録後に

おける調査研究の在り方，さらに今後の課題について考察した研究である。石見銀山は当初，産業遺産としての登録を目指していた。しかし，登録の最終局面においてイコモスから延期の勧告がなされた。この勧告を受けて文化的景観への登録を目指す方向へアジャストが行われた。再申請においては自然との共生という面が評価されて登録に至った。今後は，調査研究成果の公開と共有が必要であるとまとめられている。

▼ G23

Reference：中村唯史（2013）. 明治時代の測量資料にみる石見銀山坑道の特徴. 島根県地学会会報，**28**，67-73.

Key Words：三次元解析，永久部，本谷部，福石場，富鉱部

Abstract：本論文は，明治時代に石見銀山（大森鉱山）の開発を担った藤田組の図面を基に，坑道の様子を捉えた研究である。その過程で，平面図では判別が難しい水平坑道，斜坑，竪坑の関係を三次元解析から把握している。坑道は直線的な永久部に対し，本谷部は複雑な形状である。坑道には福石場が多く存在しており，そこにある福石から短時間で多くの鉱石を採掘できたことから，これが効率の高い生産を招来したと考えられる。開発初期には，地表に表出した富鉱部によって鉱石を露天掘りできた可能性も指摘されている。

▼ G24

Reference：中村唯史・西尾克己（2017）. 石見銀山遺跡で使われた石材. しまねミュージアム協議会共同研究紀要，**7**，1-8.

Key Words：切石，採石，凝灰岩，デイサイト，要石

Abstract：本論文は，石見銀山遺跡の中心集落である大森町で多用される石の特徴を述べ，石材産地との関係を考察した研究である。切り石を各所で用いる大森町では，中心集落から至近の地にも採石の跡があり，とりわけ新第三紀中新世の海底火山によって形成された凝灰岩類が集落周辺に広く分布し，それが町並み形成の一要素となっている。今回の検討を通して，大森町において石材に使われている石は，地域内で採れる凝灰岩類とデイサイトに加え，久利町赤波地区産の凝灰岩が相当量用いられている可能性が高い。

▼ G25

Reference：ながさき経済編集部（2015）. 世界遺産認定後の産業遺産の現状と課題―『石見銀山遺跡とその文化的景観』を事例に―. ながさき経済，**310**，15-27.

Key Words：世界遺産，観光ガイド，歩く観光，滞在時間，民間企業

Abstract：国内の世界遺産が増えていくなか，既認定遺産は年月が経過すると人々の関心が低下し，集客面で厳しさを増す傾向にある。石見銀山は認定から８年が経過しており，ピーク時にはバス乗車の際に行列ができていたものが，今では余裕を持って巡ることができる。当時の暮らしが今も生活のなかに息づいていることが世界遺産認定の要素となっているのが石見銀山であり，２時間程度の短時間の滞在では本来の魅力が伝わりにくい。今後の課題として，訪れた人を落胆させないための見せ方や情報発信の工夫が求められる。

▼ G26

Reference：林　泰州（2010）. 石見銀山の官民協働によるまちづくり . 地域政策研究，**13**，32-38.

Key Words：世界遺産，行動計画書，資産価値，歴史的文化的遺産，持続

Abstract：石見銀山遺跡を受け継いでいくために，銀山継承のための行動計画書がまとめられ，活動の展開が広がっている。昭和 30 年代の住民が行なった保存活動は，世界遺産登録に大きな影響を与えたが，その内容は石見銀山の価値や魅力の共有，賛同者の拡大によるものであった。こんにちでは石見銀山を活用した町づくりが展開されている。要するに，資産の価値や魅力の共有をいかに持続させるかが，歴史的文化的資産を活かした町づくりには欠かせない要素であり，後世にわたって受け継いでいくべき活動である。

▼ G27

Reference：原田洋一郎（2010）. 石見銀山周辺における「町」を持つ村に関する基礎的研究. 東京都立産業技

術高等専門学校研究紀要，4，91-100.

Key Words：町を持つ村　町区域　景観　地名　集散地

Abstract：本論文は，銀山開発と周辺地域との対応関係のあり方を解明するための基礎的な作業として，断片的に残る文献資料を補うために景観・地名・伝承などを用いて，銀山周辺の「町」を持つ村が如何なる特徴を有していたかを検討した研究である。「町」を持つ村は，いずれも石見銀山に向かう街道上の要地に物資の集散地として分布しているが，その成立背景は多様である。今回例示した村のみならず，他の集落にも着目して相互関係を比較考察するなどして，銀山を取り巻く地域全体の構造的な把握に努める必要がある。

▼ G28

Reference：原田洋一郎（2013）. 石見銀山御料宅野浦における廻船商売に関する一考察. 東京都立産業技術高等専門学校研究紀要，7，50-60.

Key Words：宅野浦，増屋，廻船商売，藤間家，大坂

Abstract：本論文は，石見銀山御領の小規模な港町である宅野浦における廻船商売がどのように展開したかについて，増屋の史料を用いて具体的に検討していく研究である。近世初頭に，出雲方面から海路によって運ばれた銀山向けの物資，おそらくは鉄の輸送によって宅野浦の町が成立し，発展した可能性がきわめて高い。廻船商売はこの港町が，鉄の集散との関連で発展したことを指しており，鉄生産地と港町を結ぶ者，御領内の各港町と大坂など遠隔地の市場とを結ぶ者の分業と連携が重要な役割を果たしていたことがわかる。

▼ G29

Referenc：パンノイ　ナッタポン（2013）.「遺産」と「生活」と「観光」が調和した世界遺産を目指して―石見銀山の世界遺産登録に向けた官民協働の軌跡―. 地理，58（11），64-71.

Key Words：世界文化遺産，リビング・ヘリテージ地域，観光産業，地域経済，官民協働

Abstract：重要伝統的建造物群保存地区として1987年に指定を受けた大田市大森地区は，石見銀山の中心集落として栄えた場所で，鉱山地区を含むより広い地域を世界文化遺産に登録するという機運が1990年代半ばより高まった。人々が生活を営む場所が指定されると，そこはリビング・ヘリテージ地域として，観光産業で地域経済が潤う中で「文化遺産保存」と「生活環境保全」の両立を迫られる。この論文では，官民協働の取組を通じて居住者の意識が世界文化遺産への登録前後で変化していく過程が克明に綴られている。

▼ G30

Reference：引野道生（2011）. 石見銀山遺跡への入り口―地域歴史遺産の活用（石見銀山世界遺産センター―. 都市問題，102（11），76-80.

Key Words：アジア初，産業遺産，観光客，世界遺産センター，官民連携

Abstract：2007年6月28日，NZのクライストチャーチで開かれたユネスコの世界遺産委員会で，島根県大田市の石見銀山遺跡が日本で14番目，アジア初の産業遺産として世界文化遺産に登録されることが決まった。観光客は年々増加し，ピーク時にはトイレや休憩所，食事場所などの，基盤施設の整備が不十分で混乱もあった。しかし，石見銀山世界遺産センターなど，官民が連携して実現させた全体のシステムは円滑に機能している。一方，遺跡全体の調査研究，情報発信や展示には，今なお改善の余地が残されている。

▼ G31

Reference：廣嶋清志（2010）. 幕末石見銀山領における就業移動―持高階層別家再生産率に関連して―. 山陰研究，3，1-36.

Key Words：就業，出生率，階層，出職，宗門改帳

Abstract：この論文は，幕末の人口増加をもたらした要因が低階層の世帯の出職（出稼ぎ）が減少したことによると仮定し，宗門改帳の分析を通じて検証した研究である。出職とは，すなわち就業に伴う人口移動である。一方，幕末期には出職の際に宗門改帳上では転出（家には不在）と記されていたため，既婚者が出職した場合

には低階層の世帯において結婚生活が阻害され，結婚率の高さの割には出生率が高くならない事態を招いていた。その出職が減少することが契機となって，出生率や家再生産率が高くなったと推察できる。

▼ G32

Reference：廣嶋清志（2011）. 幕末の村の人口移動―石見銀山領宗門改帳から見る―. 統計，**62**(1)，7-15.

Key Words：宗門改帳，人口移動，出職，階層，人口変動

Abstract：本研究では単年次多村型の宗門改帳を使い石見銀山領内の人口移動について考究している。移動理由は婚姻とそれ以外に分けられる。移動の方向は転出が転入より多く，性別では女性の方が多く，移動先は近隣の村が多数である。年齢は転出では 10 代，転入では 20 代が多く，何年後かに戻ってくることも示される。持高階層別では無高が最も多く，生活の不安定さと身軽さが考えられる。さらに無高層では高い層に比べ遠方の移動が多いため，出稼ぎと推定され，婚姻率・出生率，人口変動の要因の一つと推察される。

▼ G33

Reference：廣嶋清志（2016）. 人口の男性化と増加―近世後半の出雲国神門群にみる―. 山陰研究 **9**，19-36.

Key Words：性比，世帯増加率，世帯人数，マビキ，死亡率

Abstract：本研究は，男女別の人口増加率や性比，世帯数，世帯人数を指標として，その時間的・空間的差異の解明を試みたものである。総人口（男女を合算した人口）に占める男性の比率が高ければ「性比が高い」というが，18 世紀中葉では性比の高さと世帯人数が負の相関を示し，とくに山間部では性比が高い傾向にあった。このことは女児のマビキが山間部で横行していたことを示唆している。しかし，19 世紀前半には性比の上昇に歯止めがかかった。このことから，女児のマビキが山間部を中心として鎮静化したと推論できる。

▼ G34

Reference：廣瀬文太郎（2015）. 石見銀山新切間歩の構造に関する研究. 古代文化研究，**23**，101-123.

Key Words：新切間歩，鉱脈，坑道，高感度望遠ズーム撮影，二重穴

Abstract：石見銀山に数ある間歩は，鉱脈を求めて伸びていった鉱石採掘用の坑道である。そのうち比較的大規模なものは 5 つあり，これらを総称して現地では五ヶ山と呼ぶ。新切間歩もその一つである。この間歩は，清水谷精錬所跡から西南西約 400m の銀山川右岸，標高 182m の地点に坑口を持つ。2014 年の調査時点では内部は公開されていないものの，古地図，掘削された江戸時代の技術，坑口からの高感度望遠ズーム撮影結果から，大切（本坑道）の他に水道（排水坑道）を備えた二重穴構造であるとするのが穏当である。

▼ G35

Reference：廣瀬文太郎（2018）. 石見銀山における江戸時代の小規模な間歩の掘削に要した時間の検討. 古代文化研究，**26**，53-68.

Key Words：間歩，坑道，掘削，積算，作業時間

Abstract：本研究は，石見銀山の間歩について，江戸時代の記録を史料に用いて，標準的な坑道の垂直断面が矩形であるとの条件のもと，坑口から坑道最深部までの間歩の掘削に要した作業日数と作業時間を推定した労作である。求められた掘削日数や掘削時間は，岩盤の硬さや個々の作業効率，作業従事者の技量（巧拙），その他の個別条件などは，江戸時代の標準的な作業量を基礎とし，平均化のうえ算出されたものである。本研究による推定を踏まえれば，江戸時代の積算の考え方は，現代の公共工事等のそれと近いことがわかる。。

▼ G36

Reference：藤原雄高・平野芳英・仲野義文（2011）. 石見銀山資料館史―地域における小規模博物館・資料館の存在意義―. しまねミュージアム協議会共同研究紀要，**1**，1-65.

Key Words：石見銀山資料館，小規模博物館，旧邇摩郡役所，大森保育所，世界文化遺産

Abstract：旧邇摩郡役所から大森保育園に転用された木造建物は，建物老朽化により解体の危機にあったが，大森観光協会が無償貸与を受けて補強改修し，1976 年に石見銀山資料館となって開館した。この館では，国

史跡として1969年に指定された石見銀山に関する資史料の保存管理と研究を行い，2007年に当地域一帯が世界文化遺産に指定されることに大きく貢献した。この論文は，地域に根差した小規模博物館の意義を理解できるとともに，館史のみならず開館後の地域史をも含んでおり，史料的な価値が極めて高い。

▼ G37

Reference：渡部孝幸（2010）. 世界遺産の町・石見銀山を守る. 建築／社会，**31**（3），44-48.

Key Words：世界遺産　大田市大森町　町並み保存　保存修理，修景

Abstract：本研究は，石見銀山を世界遺産へ登録申請するに際し，大森地区の伝統的な町並みの保存修理が20年にわたって行われた。銀山最盛期とは異なり，現存しているのは大森町だけで，狭い谷筋に武家と町屋が混在しつつ町並みを形成している。この集落の修景は，全てを創建時に戻すのではなく，生活の変化を読み取れるようなものを残しつつ進められた。その際，建物が持つ歴史を最大限残し後世に伝えるため，後世の人々から評価される修理を継続していく必要があり，このことが本研究で最大の主張点となっている。

「津和野」で検索してヒットするもののうち，地理学に関連が深いと考えられる2010年以降に発行された5頁以上の文献を選別した。ただし，内容が類似していると考えられる文献は新しい方を優先記載している。なお，「津和野」と「津和野町」はキーワードから割愛している。

▼ T01

Reference：川﨑瑞穂（2016）. 音楽と舞踊からみる中世の鷺舞―山口・津和野の事例の比較分析を中心に―. リズム研究，**16**，33-43.

Key Words：民俗芸能，鷺舞，御霊会，棒振り，動態

Abstract：本論文は，現存する山口市と津和野町の鷺舞を比較分析し，その共通点と相違点から中世の鷺舞がどのようなものであったかを考察した研究である。鷺舞は中世の祇園社における「御霊会」で行われていたものが起源と考えられ，それは断絶してしまっているが，山口市の鷺舞は古来の形態を受け継ぐものであり，津和野町のそれは，1643年に復興した京都の鷺舞を受け継いでいるものである。ここからは鷺舞の変遷だけでなく，芸能全体が「動態a dynamic state」として継承され現存していることもわかる。

▼ T02

Reference：佐藤宏之（2014）. 城の受け取りと武家の財―近世の城，その構成要素―. 国立歴史民俗博物館研究報告，**182**，75-87.

Key Words：津和野城，改易処分，武器，城米，目録化

Abstract：本論文は，津和野城藩主であった坂崎氏が千姫事件を契機に改易処分となった後，津和野城がいかにして次の藩主に明け渡されたのかについて明らかにしている。分析の際，津和野城だけでなく他の城の明け渡しについての史資料をもとに解読が行われている。城は武器を保存した状態で開け明け渡されるのが秀吉の時代からの通例であったが，これが江戸後期になると，明け渡しの中心は武器から城米に移行した。津和野城の場合は，武器と城米の両方が目録化された状態で明け渡しが行われた。

▼ T03

Reference：多田泰之・三森利昭・大丸裕武（2014）. 平成25年7月28日島根県津和野町における集中豪雨による土砂災害. 水利科学，**58**（2），162-179.

Key Words：平成25年7月28日豪雨，AMeDAS，土砂災害，名賀川，破堤

Abstract：2013（平成25）年7月28日豪雨は，山口県萩市徳佐から島根県津和野町にかけての山間部に記録的な豪雨（350～380mm/日）をもたらし，同地域に鉄道や道路の寸断という甚大な被害を与え死者・行方

不明者も出した。AMeDASデータによれば，この豪雨は局地的で，津和野川や名賀川などの流域で支流である小河川が氾濫した。主に流紋岩の流盤構造を地質にもつ急斜面で発生した土石流が河川の流れをせき止めて水位上昇を招き，堤防が設けられた区間では各所で破堤が生じ，それが被害を増長する結果となった。

▼ T04

Reference：中林秀光・大窪健之・金　度源（2018）. 重伝建地区における防災訓練の実施とその改善方針の提案―島根県津和野重伝建地区を対象として―. 歴史都市防災論文集，**12**，41-46.

Key Words：重要伝統的建造物群保存地区，町並み保存，防災訓練，道路幅員，災害対策型避難訓練

Abstract：一般に重要伝統的建造物群保存地区では，町並みの保存のためにハード面での防災対策に限界がある。津和野の重伝建地区でも従来は防災訓練が行われてこなかった。地区の立地から想定される災害には火災，土砂災害，浸水，震災など複数あり，それぞれの災害に対応した防災対策が必要である。また，地区内の道路が狭いことによる消防の到着遅延の恐れもあり，住民による防災活動も不可欠とされた。重伝建地区住民参加の避難訓練の結果の分析から，消火訓練，防災訓練に関して再検討の必要が示唆された。

▼ T05

Reference：松島　弘（2012）. 森鴎外と津和野. 鴎外，**91**，241-246.

Key Words：文豪，森鴎外，養老館，儒学，傍観者

Abstract：偉大なる文豪で知られる森鴎外は，津和野で生まれた。彼は津和野の藩校「養老館」に学んだ頃から神童と呼ばれ，幼少期にここで学んだ儒学の価値観は，その後の哲学思想に多大なる影響を及ぼしている。山々に囲まれ多雪地帯である津和野の冬が雪に閉ざされることから勉学と読書に専念したことが，陸軍軍医総監，医務局長でありながら自らを傍観者とする性格の礎となっている。こうした津和野の環境が偉人森鴎外を育んだといえる。生涯津和野と縁があった彼の骨の一部は，津和野永明寺に分骨されている。

▼ T06

Reference：山路興造（2019）. 風流系芸能における「囃子物」の位置づけ―島根県津和野町弥栄神社「鷺舞」を中心に―. 民俗芸能，**99**，図巻頭1p. +19-54.

Key Words：津和野弥栄神社，鷺舞，傘鉾，囃子物，渡御

Abstract：津和野弥栄神社の民俗芸能神事である鷺舞は，京都の祇園御霊会（祇園祭）において傘鉾が演じる形態や音階を色濃く残しており，中世の町人たちが生み出した文化を京都以上に現代へ伝えている。本論文では，祇園御霊会にみられる特徴を，とくに津和野の鷺舞と縁の深い傘鉾に求め，それとの類似点を洗い出すという考究が展開される。御旅所への渡御と呼ばれる巡行も酷似しており，鷺舞には新しい要素が付加されている部分があるものの，その舞や楽器，音階には中世起源の囃子物の特徴が色濃く滲み出している。

▼ T07

Reference：米本　潔（2019）. 日本遺産認定にみる文化財保護行政の課題―島根県津和野町の事例から―. 遺跡学研究（日本遺跡学会誌），**16**，17-34.

Key Words：日本遺産，魅力発信事業. 歴史文化基本構想，文化財保護行政，観光資源

Abstract：津和野町は，ストーリー「津和野今昔～百景図を歩く～」が 2015（平成 27）年度の第 1 回の日本遺産に認定され，3 年間で約 7，600 万円の補助金を得て日本遺産魅力発信事業を実施した。その単独認定には「歴史文化基本構想」を策定済みということがある。津和野町は，2010（平成 22）年度の歴史文化基本構想の策定後，各種調査事業を通じての指定や登録，保存修理事業など文化財保護のための各種事業に取り組んできた。しかし，日本遺産には文化財の保存，管理，観光資源としての活用など，多くの課題がある。

▼ T08

Reference：若槻　健（2019）. ちょっと拝見　学校訪問　島根県立津和野高等学校　独自の形で高校魅力化を実現―地域との「共働」を形にする学校改革―. 月刊高校教育，**52**(9)，10-15.

Key Words：センセイオフィス，高校魅力化コーディネーター，社会貢献，生きる力，T-PLAN

Abstract：津和野高校は，様々な取り組みを通して，自らの魅力を高めていこうとする気風に満ちている。同校のセンセイオフィスは，学校外との協働によって，生徒に質の高い学びと育ちを促し，教職員の業務の改善に寄与し，協働を大切にする津和野高校の象徴となっている。さらに，高校魅力化コーディネーターをはじめとした地域との協働による学びの深化や，T-PLANと呼ばれる地域貢献型の生徒の探究活動を通して，地域活動への参画を促し，地域の活性化を図るという，協働による好循環型サイクルが確立されている。

▼ T09

Reference：L. Kahlow（2017）. 津和野の鷺舞―現在に伝わる中世芸能―. 法政大学大学院紀要，**78**，38-47.

Key Words：鷺舞，現地調査，図像史料，音楽分析，祇園囃子，日本民俗音楽

Abstract：著者は．津和野の鷺舞を扱った本論文で，鷺舞という民俗芸能神事について，現地調査を通じて画像撮影と音の採録に成功している。前者の画像分析においては図像史料との比較が行われ，後者の音の採録では鷺舞における囃子の旋律が日本民俗音楽の特徴を色濃く残していることを導出した。音楽分析については，京都の祇園囃子との比較検討にまで踏み込んでいる。こうした視覚と聴覚の両面にわたる分析の結果，津和野の鷺舞は室町期にまで遡及できる長い歴史を重ねた貴重なものであることが判明した。

▼ T10

Reference：L. Kahlow（2018）．“Dance of the Herons”（sagimai）of Tsuwano：A well-preserved medieval performance art（津和野の鷺舞―中世芸能とその伝承―）. 国際日本学論叢，**15**，1-35.

Key Words：鷺舞，囃子，棒振り，羯鼓舞，重要無形民俗文化財

Abstract：本論文は，毎年7月20・27日に津和野弥栄神社祇園祭の神事として行われる鷺舞を英語で詳細に論じたものである。鷺舞は，津和野の民俗芸能の中で最も著名なものであり，16世紀中葉に始められ17世紀半ばに再興されて以降，今日まで連綿と継承されてきた。2羽の鷺を舞方が演じ，笛・鼓・鉦・太鼓を奏でる囃子方の音に合わせた鷺舞は観る者を優雅さで魅了する。舞方と囃子方の他には，鷺の周りを回る2人の棒振り，鷺の後方では2名が羯鼓舞を演じる。1994年には国の重要無形民俗文化財に指定された。